

THEATER ENYA [佐賀県唐津市]

THATER ENYA 入口外観。
複合移設KARAEの
中庭部分にシアターがある



文化のインフラストラクチャーとしての 映画館

甲斐田晴子

映画館がなくなって久しい唐津に映画館が復活した。
シネコン全盛の時代に地方でミニシアターを始めたわけとは

【映画館情報】

所在地:佐賀県唐津市京町 1783 KARAE1F
TEL: 0955-53-8064
席数:62席

THEATER ENYA 誕生の背景

映画館 THEATER ENYA は2019年10月に唐津に22年ぶりに復活した70席ほどのミニシアターである。一般社団法人 Karatsu Culture Commission が運営主体であるが、この団体の前身は、2011年に発足した「唐津シネマの会」という定期的な映画の上映会を行ってきた市民団体だった。この市民団体は、唐津の中心市街地活性化の牽引役として、2010年に設立されたまちづくり会社であるいきいき唐津株式会社が立ち上げたものだ。

唐津市は佐賀県北部に位置する11万人ほどの地方都市で、ユネスコ無形文化遺産にも登録された「唐津くんち」や「唐津焼」などの祭りや伝統文化、日本三大松原である「虹ノ松原」などの風光明媚

な観光地としても知られている。そんな地方都市で、何故「定期的な上映会」を始めたのか。それは、少子高齢化・人口減少が進み、商店街の空き店舗が増え衰退していく中で、その解決の糸口を見つけようと、まちづくり会社である



ホテル、カフェレストラン、アンテナショップ、やきものギャラリーが入った複合商業施設KARAE。1階に映画館がある

いきいき唐津がアンケート調査を行ったことがきっかけだった。商店街の活性化のために人々が求めるサービスや機能を知るためのニーズ調査だったのだが、調査結果は、2010年～2011年と「カフェ」「映画館」「本屋」がTOP3を占めていた。物販サービスは郊外の大規模店や地元大型スーパーに移行し、駅やバスセンターからウォークアブルな商店街を中心とする街中には、文化娯楽などの時間消費型サービスや機能を求める声が大きかったのだ。そのうち、カフェと映

画館を何とかまちづくり会社で実現しようという運びとなった。

カフェは難しい挑戦ではあったもののビジネスモデルが確立した分野で、約半年で何とか開業にこぎつけ、以降2019年に始まったコロナ禍に至るまで黒字経営を続けることができた。一方で、映画館はそう簡単にはことが進まなかった。理由としては一つに、映画館を建設するのに、大きな投資が必要であること、次にその投資回収をし、持続可能に運営するための既存の映画館の収益モデルが崩壊していることだった。当時、調査のため西日本をはじめミニシアターと呼ばれる映画館をめぐる中で、どこも映画館の鑑賞料金だ

けでは運営することが厳しい状況で、それでも映画館を運営できているのは、すでにあった映画館を利活用することで設備投資がなく減価償却も終わっていたり、映像制作やカフェなどの副業で別の収入ポケットを持っていたり、ほとんど従業員を雇わず、もしくは家族経営したりしているからだ。またシネコンも30万人以上のマーケットが見込めないと進出しないという事もわかってきた。

設立間もない会社で、資金力もなく鑑賞料金だけでは成り立たないビジネスモデルに投資することが難しい中で編み出したのは、市の70席ほどのホールを週に2日間定期的に借りて上映会を実施するという方法だった。また一方で、収入源として、鑑賞料金のほかに毎年更新の一定の鑑賞券を購入する法人スポンサー制度をつくり、営業に力を入れ、現在では105社の地元企業が映画館を支えてくれている。

それでも、やはり定期的な上映会でなく「映画館」というハコを建設するに至ったのは、飲食規制のある市のホールで実施する「非劇場」と位置付けられる定期的な上映会形式では、「新作が観たい」、「商業映画を観たい」、「飲み物や食べ物と一緒に映画を楽しみたい」などの顧客ニーズに十分に答えることができなかったためである。

そのようなジレンマがある中で、いきいき唐津では、同時期に商店街に再開発事業として、複合商業施設「KARAE」(2019年)の建設計画が走っており、映画館を復活させるには、またとないチャンスが到来していた。それでも映画館の建設資金調達、返済や映画館の維持費・人件費など、定期的な上映会とは比較にならない投資と経費がかかるだろう中で、映画館建設に踏み切れたのは、唐津シネマの会を非営利団体(現在の一般社団法人Karatsu Culture Commission)として法人化させ「佐賀県NPO支援ふるさと納税」の対象団体として認定される見込みがあったためだ。

以上のように、まちづくり会社による再開発のタイミング、7年間という定期的な上映会という草の根活動によって獲



劇場内部の様子。席数は62席

得した100社以上の法人スポンサー、そして佐賀県NPO支援ふるさと納税制度によって、映画館が持続可能に運営できる確信を持つことができたことで、映画館復活へ大きく舵を切ることができた。

地方におけるミニシアターの役割

映画館は、テレビやゲーム、インターネットなどが普及する前は、地域の人々にとって、唯一無二の最大の娯楽であり、地域の人々がこぞって映画館に足を運んだ時代があった。唐津も全盛期は10館を超える映画館が存在していた。しかしその後、様々な娯楽が普及し、映画という娯楽が相対化され、また人口も都市に流出が続く中で、来館者数が減少し地方から次々と映画館が姿を消していった。ここでは現代の地方都市において、改めて映画館が果たす役割とは何かを振り返りたい。

「唐津シネマの会」の発足当初から、「なぜ今映画なのか」というテーマに対して地域の皆さんにお伝えしてきたことは、映画の上映会は「予防福祉」や「文化教育の機会の担保」、そして「地域活性化」に貢献できる取り組みだということだ。超高齢化社会を迎える地方では、お年寄りが孤独にただ生きながらえるのではなく、いかに楽しく生きがいを持って元気に暮らすか、「健康寿命」が大切なテーマになっている。映画館のメインの顧客層は中高年層であり、映画館に通う事で、社会や人との接点を持つ人は少なくない。若いころに映画館に足を運んでいた中高年層は、映画館で映画を楽しむ喜びを、どの世代よりも多く知っている。次に人口減少社会では、行政財源が減少していくなかで、必要な生活インフラが優先され文化芸術の事業は削られやすく、それは子どもたちにも及ぶ。身近に映画館があるということは、若者にとっても総合芸術ともいわれる映像文化を享受できる機会の担保となる。最後に、地域活性化という点だが、観たい映画があれば、街にいるんな人々が訪れる目的になるし、作品によっては市外か

人も人はやってくる。また映画館は二次消費が起りやすいため、地域の経済波及効果もある。例えば映画鑑賞前後の飲食や買い物によって周辺の店舗が潤うというものである。これらの映画館の役割や機能を効果的にするために、THEATER ENYAでは、九州の高校生以下の学生は年間5,000円で映画が見放題になる「学生サブスクリプション」

制度を創設し、また商店街一円で、「クーポン提供店」を募り、当館で映画鑑賞した人々が商店街全体に広がり飲食・買い物を楽しむような仕掛けづくり、面的なにぎわい創出につとめている。

映画館は文化のインフラストラクチャー

さらには、365日老若男女に開かれた映画館は地域にとって、「文化のインフラストラクチャー」だと考えている。そこで上映される映画は、毎月山のように配給会社から案内される作品の中から、キュレーションされた作品たちだ。また「ミニシアター」であるという点も重要だ。実は、日本で制作される映画の6割はミニシアターでしか上映されていない^❶。

つまり、いまやミニシアターは日本映画文化の多様性を支える重要な存在にもなっていて、反対に言えば、シネコンや配信でも観れない「ミニシアターでしか」鑑賞できない多彩で豊かな映像作品が多く存在するという事である。ミニシアターは、大手の配給会社から独立した経営で、作品の選定、イベントの実施などについて裁量をもち運営できるゆえに、「採算性」という物差し以外で独自の映画館の特色を出すことができる。例えば、当館の上映作品の選定は、お客さんのリクエストに応えた商業映画も上映するし、映画館イチオシのアート映画やインディーズ映画も上映する。また舞台挨拶を希望する関係者には、基本的にすべて機会を提供している。そうすることで、作り手の貴重な話や視点を観客は知り学ぶことができるし、知名度にかかわらずダイヤの原石のような面白い作品に出会うことだってある。

そのような映像文化をエンタメとして日々気軽に享受できるまちに開かれた映画館は、暮らす人々の心の豊かさを支え、まちに人々を呼び込む、まさに「文化のインフラストラクチャー」なのだ。

文化を通したまちづくり

つい先日『ガザ～素顔の日常～』という映画を上映し、映

❶ 1…玄田 悠大『日本ミニシアター取材記—JFF+ INDEPENDENT CINEMA 2023』ミニシアター紹介映像制作から—』(をちこちWeb Magazine)



唐津が舞台となった大林宣彦監督映画『花筐』の上映も行う

画の配給会社代表の関根健次さんの話を聞くトークイベントを開催した。2022年10月7日に起こったハマスによるテロ行為を起因とした4カ月に及ぶ報復戦争が繰り返されているが、その戦争によって犠牲になっている人々の素顔を知ることができるドキュメンタリーで、感銘と衝撃を受けたのと同時にその戦争に無関心でいた自分をひどく恥じ、反省した。戦争の正体とは何で、人類の幸福や平和がどのようにしたら実現できるのか、私達にできることはないか、直視しなければならぬ世界の現実をまざまざと見せられ考えさせられた。このような映画に出会うと、映画館の役割は、この戦争をせめて一人でも多く関心を持ってもらうきっかけを提供することだと感じる。

そのドキュメンタリーで印象的だったのは、戦争の恐怖に怯えながら暮らす暮らしの中で、人々が苦しい時、悲しい時に歌や音楽、演劇などで自身の魂を浄化させていくシーンだった。文化とは様々な定義があるが、その一つに「人類の理想を実現して行く、精神の活動」というものがある。本作を通して、映画に限らず音楽やスポーツ、演劇など、その文化の精神の営みは、人間が人間であり続けるための根底を支えているとさえ感じた。

そして、人口減少・少子高齢化の進む日本の地方都市は今、誰も経験したことのない時代を迎えており、一人一人がどのように生きるのか、どのような社会であれば人間が幸福なのか向き合わなければならない。映画館の暗闇の中、五感を研ぎ澄ませて世界中の映像作品を観ていくと、その豊かな多様性の根底には、共通して「人類の理想を追求する精神の活動」が確かに存在する。

まちづくりというと、これまで再開発などのハード面が取り沙汰されることが多かったが、私たち一人ひとりがどのような社会を実現したいのかを問われる地方都市において、「文化」を通したまちづくりは間違っていないし、今後ますます重要性をますます確信している。

まちづくりというと、これまで再開発などのハード面が取り沙汰されることが多かったが、私たち一人ひとりがどのような社会を実現したいのかを問われる地方都市において、「文化」を通したまちづくりは間違っていないし、今後ますます重要性をますます確信している。

かいたはるこ

1981年生まれ。佐賀県唐津市出身。早稲田大学政治経済学部卒業。フランスグルノーブル政治学院留学。予備校講師、広告代理店を経て2011年いきいき唐津株式会社に入社。飲食店、映画事業などをプロデュースし、2014年より同社の専務取締役。再開発事業「KARAE」を牽引し、唐津に22年ぶりとなる映画館「THEATER ENYA」を復活させ、初代映画館館長に就任。「佐賀さいこう表彰」女性活躍推進部門受賞(2016年)。執筆論文に「中心市街地活性化におけるまちづくり会社の役割と課題」(経済地理学年報2016)